

2015年
1月8日
木曜日

上村敏之 教授（財政学）

認識の偏りを認識する

ように思います。

統計学では、データを取得して分析します。小学1年生の体重を調べ、横軸は小学1年生の体重、縦軸は頻度とすれば、釣り鐘型の正規分布が描けます。多くのデータは、このような分布をもちます。大事なのは、分布がどのような形になっているかということではありません。私たちが認識している情報は、分布の一部の情報でしかないかもしれない、ということなのです。

就職活動で内定をとった学生の情報は、分布の片側だけの情報だと考えられます。有名企業ならば、多くの学生がエントリーしますので、面接まで到達して、内定をとる学生の数は、かなり限られています。だとすれば、内定をとった学生からの情報は、分布の片側の先端部分からの情報ということなのです。失敗から学ぶ

ことができない、という意味で、情報が偏っているのです。

国や地方自治体は、一般市民に対する行政サービスを実施することが求められているにもかかわらず、一般市民とはいえない特定の人たちに対してサービスを実施することがあります。実際は一般市民とはかけ離れたラウド・マイノリティに対し、一般市民の税負担を使ってサービスがなされているかもしれません。サイレント・マジORITYの声をいかに聞くかが、行政にとつては重要なのですが、ラウド・マイノリティが全体だと思ふ間違いを犯してしまうことがあります。

同じようなことは、インターネットの世界にもありそうです。インターネットで盛んに主張されていることが、世間一般の価値判断なのかといえれば、そうでもないように思う

ときがあります。インターネットに書き込んでいる人がマジORITYかといえれば、そうではありません。多くの人はサイレント・マジORITYであり、インターネットを見ていない、もしくは、見ても同意していない、書き込んでいない可能性があります。

だからこそ、いまの時代は、いったん、自分の認識が偏っていることを認識することが、必要なように感じるのです。いま、入手している情報をみて、それが全体であるとは考えず、表に出ていない情報があるのではないかと想像する。隠れた情報が、大事なことがあります。私たちは、いまある偏った情報だけで、判断してはいないでしょうか。このような考え方ができれば、私たちは、もっと、バランスの良い考え方ができるのではないかと思うのです。■

私が、関西学院大学の魅力を知ったのは、大学院生になって、他の大学を訪問するようになってからでした。卒業したゼミ生と、いまでも頻繁に連絡をとりあっていますが、彼らが口々にいうことは、卒業してから関西学院大学の魅力に気づいた、ということなのです。離れることで、初めて分かることは、とても多くあるのです。

ゼミ生の就職活動の情報収集をみていて思うことですが、就職に関する情報は、かなり偏っているように感じます。企業の説明会で、その企業はよい情報しか提供してくれませんが、悪い情報は間違いなく隠されたままです。内定をとった先輩からも、偏った情報しか入手できません。内定をとらなかつた学生が多くいるわけで、むしろ、そこに就職活動をする学生が得るべき情報がある